



2014-2015年度

広島北

ロータリークラブ週報



Rotary Club of Hiroshima North
2015年1月8日発行 Vol. 1418

国際ロータリー会長 ゲイリー C.K. ホアン 氏
国際ロータリーテーマ

LIGHT UP ROTARY

ロータリーに輝きを

■会長 河本 浩一 ■幹事 合田 尚義
事務局 広島市南区松原町 1-5 ホテルグランヴィア広島 6F
TEL 082-506-0050 FAX 082-506-2530
E-Mail:hnrc@world.ocn.ne.jp URL http://www.hnrc.jp/
例会 毎週木曜日 12:30 ホテルグランヴィア広島

■本日の例会 2015年1月8日(木) 第2207回
国歌斉唱
ロータリーソング 「奉仕の理想」
四つのテスト 職業奉仕委員会
来客紹介 ローター-家族親睦委員会
会員誕生月お祝い
会長時間
幹事報告
委員会・同好会報告
ニコニコ箱
卓話時間 会長 河本 浩一 会員 「年頭挨拶」

委員会報告

青少年奉仕委員会 越智委員長
RYLAに是非ご参加ください。
IM実行委員会 山坂実行委員長
例会終了後、IM実行委員会を開催します。
また先日よりIMのご案内をお送りしておりますが、今回は当クラブがホストクラブです。なるべくご出席頂き、運営等をお手伝い頂きますようお願いいたします。

ニコニコ箱

ニコニコ委員会

【自主出宝】

河本会員・中山会員・合田会員・二井本会員・佐々木会員
七代 金城一国齋様、本日は当クラブの例会にお越し頂きありがとうございます。卓話を楽しみにしております。
樽本さん、入会おめでとうございます。一日も早く慣れられ、奉仕に親睦にご活躍ください。
三保会員・久保(豊)会員 七代 金城一国齋様、ようこそお出で下さいました。本日の卓話、楽しみにしております。
前会員 七代 金城一国齋様、卓話楽しみにしております。
樽本会員 本日出会させていただきます。樽本です。今後ともよろしくお願い致します。
三保会員・坪内会員・佐藤会員 樽本さん、ご入会おめでとうございます。素敵なロータリーライフを楽しんで下さい。
石井会員 樽本さん、入会おめでとうございます。早くロータリーに慣れて下さいネ！
高原会員 樽本陽輔様の入会を心より喜んでおります。
佐藤会員◇ 今月で入会2年となりました。皆様のご指導をこれからもよろしくお願い致します。先日は妻の誕生日にお花を頂きありがとうございました。
中根会員 私の事務所が、先月11月に開設20周年を迎えました。今後頑張ります。
高原会員 昨日の大雪で無事帰れたことが不思議なようです。
合田会員・二井本会員 樽本さん、先ほどはお名前の呼び間違い、大変大変失礼しました。お詫び申し上げます。

前々回例報告 2014年12月18日(木) 第2206回

ロータリーソング 「手に手つないで」
来客紹介 ローター-家族親睦委員会
入会式
会長時間
幹事報告
委員会報告
ニコニコ箱
卓話時間 漆芸家 七代 金城 一国齋 氏 「漆の美 高盛絵の技」

入会式

樽本陽輔氏の入会式が執り行われました。



ご入会おめでとうございます。

樽本 陽輔 会員
(たるもと ようすけ)
推薦者:三保会員、坪内会員
職業分類:人材派遣
勤務先:(株)シナジー 常務取締役
所属委員会:ローター-家族親睦委員会、社会奉仕委員会

幹事報告

*次週25日(木)は「夜間例会&クリスマス家族会」です。
*ローター-青少年指導者養成セミナー(RYLA)ご案内 (BOX配布)
*2013-14年度 地区活動報告書 (BOX配布)

当日計 24,000円(内、web7,000円) 累計 778,000円
★=10,000円 ☆=5,000円 ◆=3,000円 ◇=2,000円



卓話時間

「漆の美 高盛絵の技」

漆芸家 七代 金城一國齋 氏

皆さま、こんにちは。今日は広島北ロータリークラブの例会にお招きいただきまして、ありがとうございます。今日は「漆の美 高盛絵の技」ということで、少しお話をしたいと思います。今日、実際に3点ほど作品も持ってきております。皆さまから向かって右側のものが、こちらは三代の一國齋の作品です。ですから私のひいひいじいさんですかね。この作品は明治27年、今から120年ぐらい前の作品ですね。



けっこう盛り上げてある立体的な模様が特徴なんですけども、高盛絵という広島に唯一、日本に唯一、広島に伝わる漆の技法、これを最初に創案したのが二代の一國齋、それを完成させたのが、この三代一國齋といわれています。

以来ずっと広島でこの技法も守り続けているわけなんですけども、現在、私が七代目になります。そもそも金城一國齋という名前を聞かれたときに、ほとんどの方が沖縄ですかというふうに聞かれるんですけども、私の家は、初代の一國齋が尾張徳川家のお抱えの蒔絵師だったんですね。1811年に名古屋城にちなんで金城と、一國者、一國一城とかですね、そういったことで一國齋という名前を名乗りました。

二代の一國齋がそのまま名古屋にとどまっておれば、仕事が十分あったんでしょうけども、尾張藩を出まして、全国を回っているうちに広島に、1843年に来ました。特に浅野についてきたわけでもなく、たまたま眼病の治療のために広島に来たのがきっかけです。広島に約10年間ほど、療養のために住みました。

そして後に三代の一國齋になった木下兼太郎、当時まだ15歳だったんですけども、もともと私の家は江波焼をしていたんですけども、将来江波焼を継ぐ予定だった木下兼太郎が、焼き物よりも漆のほうに興味があるということで、二代の一國齋が、この三代の一國齋になった木下兼太郎を弟子にとりました。

約10年間ほど一緒に仕事をしているなかで、ある日突然二代の一國齋が、もう二度と私はこの名前を名乗らないと、君にすべて、この名前とこの技術を託して、私は旅に出るということで、再び広島を、全国、旅に出ました。以来、この木下兼太郎が三代の一國齋となって、明治、大正、昭和、平成と、この技法が広島に伝わっております。

皆さんも漆というのは、漆芸というのはご存じだと思うんですけども、世界に誇る、日本の工芸のなかでも、特にこの漆芸というのが非常に日本を代表する工芸として、世界的には認めています。

まず、漆という塗料の話なんですけども、原材料の話なんですけども、天然の塗料でして、アジア帯から採れる、漆の木から採取した樹液ですね。ちょうどゴムの木からゴムを採取するのと同じような方法で採るんですけども。今日、テーブルの上に少し資料を置いておりますので、皆さん、見ていただければと思います。アジア帯に分布する漆の木があります。問題なのは漆の木の、確かにその漆自体の成分にもよるんですけども、特に違いがあるのが、その採取をする方法が違います。

非常に漆のなかでは特徴的な技法ですので、なんとなくちょっと表面、ちょっと盛り上がって、ぼこぼこしたものが、もし家にあるとおっしゃる方がいらっしゃれば、もしかしたら歴代の一國齋の作品かもわかりません。

漆器の歴史なんですけども、日本人はいつごろから使い始めたか。山形県の押出遺跡から漆の出土、土器が出土しました。5500年前の縄文前期のものと推定されています。赤漆の地に、黒漆で文様が描かれた貴重な彩漆土器が出土されています。そのほか、北海道では1万2000年前のものが出土したりとか、非常にそういった面では、特にこういう文化というのは中国から渡ってきたんじゃないかなとか、いろんな説があるんですけども、中国で今、最も古いものが、だいたい6000年ぐらい前のものが出ております。

こういう遺跡といえますかね、そういう発掘されたものというのは、発掘されればそれが「ゼロ」から「イチ」になるわけで、今現在では中国よりも、日本のほうの漆のほうが古いとされております。

もともと大陸それぞれで、それぞれの漆の最古のものを、出土したものを遺伝子学的に見ていくと、日本でできた漆器と、それから中国でできた漆器、これは基本的に遺伝子が異なると。すなわち日本は、日本の漆がもともと自生していたと。それを日本人が器に利用してきた、塗料として利用してきたということがわかります。

私は香川県の漆芸研究所で漆の基本的な技術を学び、そして広島に帰ってまいりましたが、今現在、教育機関として、公立の学校として、石川県の輪島市に石川県立輪島漆芸技術研修所、私の出ました香川県高松市に香川県漆芸研究所、この2カ所が公立の、後継者養成の施設がございます。そういうふうで大別すると二つに大きく分かれるんですけども、漆器の下地には二つ種類がありまして、京都でつくったものか、あるいは輪島でできたものか、その二つが大きく分けられます。

その分け方は、京都の下地というのは、主に京都は調度品ですね。いわゆるお公家さまとか、大名のためにつくったものが非常に京都の下地として代表です。一方、輪島というのは、皆さんもご存じだと思いますけども輪島塗、いわゆる仕器(じゅうぎ)、食器ですね。重箱とか、おわんとか、そういったものが多く使われています。

木地に使用される木材は、ケヤキ、キリ、ヒノキ、アスナロ、サクラ、クリ、アテとか、そのようなものを使います。私が出た香川県は、どちらかといえば京都の下地を勉強いたしました。京都はやはり山科というところで、山科砥の粉(とのこ)、あるいは山科地の粉(じのこ)という独特な、この下地に使う、いわゆる砥石(といし)が採れる、砥石の粉ですね、それを粉末にしたものが京都下地として使われるんですけども、一方、輪島は輪島地の粉という、これは珪藻土なんですけども、これを使って下地を施すと。

非常にやっぱり地域によってそれぞれの素材が変わってきますので、それによって自ずと下地をする工程の技法が変わってくる。最終的には日本産の漆を塗るわけですから、表面的には変わらないんですけども、例えば私が明治、それ以前のもの、江戸時代のを修復したときに、壊れた断面からこれは京都の下地か、あるいは輪島の下地かというのを推測いたします。それは輪島地の粉が使っているか、あるいは京都の山科砥の粉が使っているかというので一目瞭然なんですけどね。



それによって、また修復の方法も変わってきます。漆器制作とは、その材料や道具はすべて自然素材と手作業によるもので、加飾や意匠により、日常漆器から国宝の芸術品にまで及ぶと。よく私も実際に展覧会に出品しております、毎年ちょうど8月、7月の終わりごろ、締め切りが来るんですけども、いつもぎりぎりになってしまうんですね。なぜぎりぎりになるのかといえますと、やはり図案、デザインですね。デザインが決まれば手がスムーズに動いていくんですけども、これで勝負しようというデザインがなかなかやっぱり浮かばないんですね。

実際、今日持ってきております向こうの作品なんですけども、一番、皆さんにとって左手の作品は、これは3年前の日本伝統工芸展の入選作なんですけども、この作品は、これは本体が木ではなくて乾漆といまして、布なんです。まず石こうでこの形をつかって、その石こうに麻布を張っていきます。麻布をだいたい8枚ぐらい張り重ねていくんですね。漆に糊漆、のりを混ぜた漆で、この布を張っていきます。そしてあとからその石こうを壊すんですね。そうしますと、こういうボディーができます。

その表面に加飾をしていくんですけども、まずは何を調べるか、次にどういう形でその箱をつくるか、それにデザインをどうするか、そういったものを含め、総合的に審査の対象になりますので、このデザインが決まるまで勝負なんです。

この一國齋高盛絵というものが、二代目の一國齋がこれを考案して、三代以降ずっとこの技術を守り続けていると。特に私の家は弟子をとらずに、自分の子どもにだけに伝えていくという、一子相伝というかたちで伝えてきました。なぜそういうふうにしたのかなというふうには、よく聞かれるんですけども、普通、弟子をとって、そしてその弟子が年季明けといつて、卒業していくまで、だいたい4～5年なんです。だいたい4年から5年、自分の工房に通わせて、そして卒業していくと。

この高盛絵って技法は、とても4～5年ではマスターできる技法ではないので、自分の子どもなら自分が死ぬまで、だいたい20年から30年、ずっと弟子として抱えておくことができるんですね。そしてさらに自分の使っていた道具、あるいは材料、残った材料も全部譲ることができる。そういった非常に大きなメリットが、この一子相伝という伝承法にはあるんですね。一國齋はそれを選んで、そして代々この広島で受け継いでまいりました。

今後、今は、現在は広島県の無形文化財として、この技法が指定を受けておりますけども、いずれは国の重要無形文化財になるように、さらなる技術性を高めて作品づくりをしていきたいと思っております。この日本伝統工芸展のみならず、いろんなところでグループ展、あるいは個展を開催しておりますので、いつかまた作品を見ていただく機会があると思いますので、そのときはぜひ思い出していただければと思います。非常に短い時間でしたが、今日は「漆の美 高盛絵の技」ということでお話をさせていただきました。

ありがとうございました。

- 出席報告 出席委員会
- 2014年12月18日(木) 会員数 85名
- 出席 73名 欠席 12名
- 来賓 1名
- 12月4日例会出席率 100%
- 来客紹介 ローラー家族親睦委員会
- 七代金城一國齋 様(卓話者)

前回例報告 2014年12月25(木) 第2207回

【夜間例会&クリスマス家族会】

2014年12月25日(木)18時～
ホテルグランヴィア広島 4F「悠久」



開会挨拶 山坂クラブ管理運営常任委員長



乾杯 合田幹事



余興 広島アクターズスクールの皆さん



ピエロ



お楽しみ大抽選会



閉会挨拶 中山副会長



ローラー家族親睦委員会の皆様、お疲れ様でした！

